

第5回 大野町小中学校のあり方外部検討委員会 議事概要

- 1 日時 : 令和5年11月1日(金) 午後2時00分～午後3時30分
- 2 場所 : 大野町役場3階 委員会室
- 3 出席委員(敬称略) : 学識経験者1名、有識者1名、保護者代表3名、
地域代表6名、学校代表1名、子ども園代表1名
- 4 欠席委員(敬称略) : なし
- 5 議事の概要

○あいさつ

- ・委員長・町長によるあいさつを行った。

○協議事項(1) 児童生徒数の推計について(令和59年度まで)

- ・前回の委員会で委員より要望があった大野町小中学校の児童生徒数の将来推計(令和59年度まで)を国立社会保障人口問題研究所の2020年～2070年までの出生数推計を参考にして作成し提示した。
- ・委員からご意見があったクラス替えができる学校が良いという観点では、将来推計より、35人学級制とした場合、以下のことが読み取れる。
 - 小学校数を1つとした場合、推計最終の令和59年時点でも1学年2学級。(クラス替え可)
 - 小学校数を2つとした場合、令和27年前後以降は1学年1学級。(クラス替え不可)ただし、特別支援学級の児童生徒数を考慮した場合、令和16年度以降から1学級となる。(クラス替え不可)

○協議事項(2) 今後の小中学校のあり方について【意見交換】

- ・前回委員会時に他の委員を聞いて感じたことや付け加えたいこと、各委員所属の団体構成員の方々の意見を中心に、意見交換を行った。

区長、地域住民目線

(統廃合の必要性について)

- ・区長のほとんどが統廃合の検討に賛成している。一部の区長は、「小中一貫校を含めた検討が必要である」と意見している。
- ・一部の区長の関心は低く、他人事のように捉えている様子であった。議論の場をおろし、より多くの意見を吸い上げることで、意見がまとまるのではないか。
- ・地域住民の中では現実を理解している人が少なく、統廃合の考え方について温度差がある。周知をするべきである。

(適切な学校規模・学級数・統廃合の具体案について)

- ・社会性を身に着けるため、ある程度の学級数とクラス替えは必要である。
- ・教員の目が行き届く3クラス程度が最適である。
- ・1クラス25名程度、1学年3クラスまで、小学校は2校、中学校は1校が適当ではないか。
- ・将来の子どもの人数から、3校もしくは2校程度が適切である。
- ・現在の小学校6校と中学校2校を残すべきである。
- ・地域を反映した教育方針に基づき、大野町独自の学校規模を考えてはどうか。
- ・学校数の枠組みについて、2、3地区でひとくくりとする（例えば、4～6区を統合する等）という案もある。
- ・少なくとも通学のことを考え、国道333号線の北と南で分割してはどうか。
- ・段階的に統合してはどうか。
- ・校区が広くなりすぎると、子ども同士で遊ぶことや安全確認が心配である。
- ・現在の中学校を活用し、小中一貫2校は選択肢の一つとして考えられる。

(統廃合のメリット)

- ・他地区の児童生徒とコミュニケーションが図られ、幅広い交流に繋がる。
- ・集団の中で協調性、競争心が向上する。
- ・十分な教員の確保による密度の高い教育ができる。
- ・運動会、部活動、文化祭等の活動が活発化する。
- ・建設費を抑えられるため、余剰財源をその分教育費に充て、手厚い教育の実現が可能になるのでは。
- ・維持費、管理費、人件費等の軽減が考えられる。

(統廃合のデメリット、課題)

- ・学校に馴染めない生徒が生まれる危険性がある。
- ・通学距離が増えることにより、児童生徒や送り迎えをする親の負担が増える。バスなどの公共交通機関の整備、移動手段の検討が必要である。
- ・現在はスクールバスを運用しており、事件事故の心配が少ない。また、見守りも短い区間のため高齢医者の負担も少ない。ただし、学校までが遠くなり、登校時間が大幅に増える場合は課題が残る。
- ・現行施設を活用し再編する場合、受け入れ可能な学校運営施設の確保が困難ではないか。
- ・施設を建設しようとする、莫大な財政負担がかかる。
- ・子どもの時間が少なくなる。

- ・地域に根付いた教育環境が整えられるかどうか。
- ・地域の方々との交流がなくなる。
- ・小学校が近くにないことで、さらに子育て世代が離れ、転入者が減る。
- ・一人一人の学力の把握やきめ細やかな指導ができない。
- ・小中一貫となった場合、非行やいじめなどが低学年にも広がらないか心配である。
- ・進学先の中学校が同じ小学校とは結びつきが強いが、それ以外の小学校は知らず不安が残る。

(統廃合の検討の際に考慮すべき項目)

- ・過去の地域間のつながり。
- ・通学のための補助（スクールバス等）の充実、通学路の確保（適正化を行った後に、不満や苦情が出ないようにしてほしい。）
- ・スクールバスは統廃合には必要不可欠である。
- ・スクールバスの利用を絶対条件としたうえで統廃合するのが、この地区にとって良いのではないか。
- ・登下校が遠くなることに対するの改善及び、旧校舎の通行活用に問題がある。
- ・不登校や保健室登校時のサポート。
- ・住んでいる地域、環境が異なる人が同じ学校に通うことになるため、環境に合わない子ども、不安感の強い子ども、神経質な子どもへのサポートが必要である。
- ・どれほど少数であっても、教育支援を確保すること。
- ・公平さ。
- ・大野町は黒野地区を中心に発展した歴史があるが、現在は大きく変貌している。遠い将来をより考慮して計画して欲しい。
- ・近い将来よりも、長期に大野町を考えた最善の政策を望む。
- ・統廃合しても学校が地域のコミュニティとしての機能を維持すること。
- ・現在の学区における地域活動等の繋がりを大切にしてほしい。
- ・南部地区で外国籍の人を受け入れる学校を新設して欲しい。
- ・川合地区の厚生病院やイビデン及び神戸町の西座倉地区の工業施設で3,000人以上の雇用があり、将来は多国籍の雇用が生まれる。そのため、国際的な学校が必要となる。
- ・大垣市や瑞穂市からも受け入れが可能な学校創設を考えて欲しい。
- ・学校の授業等で、統廃合等について頻繁に議論を重ねて欲しい。
- ・地域住民にも議論の場を提供して欲しい。
- ・地域や学校運営協議会での議論をもっと重ねて欲しい。
- ・特に学校運営協議会ではこの議論は全くされていないため、もっと下ろしたらどうか。

- ・1年程延長し、議論を深めて欲しい。

(その他)

- ・大野神戸IC付近は、企業誘致を行い働く場所を提供した。新しい住民が喜ぶような政策も同様に考えて欲しい。
- ・将来を考えた施策により、工業・農業のまちとして魅力的な移住者（外国人含む）増加策の推進で、生徒に寄り添った教育の推進が可能になる。
- ・特別支援学級に向かうバスをよく見ることから、特別支援学級の児童生徒数が増加傾向にあることを実感している。
- ・地区内で意見交換を行う際に、「先のことは分からない」という人が多い。具体的に提案することで、意見を集めやすくなるのではないかな。

保護者（こども園、小学校、中学校）目線

(統廃合の必要性について)

- ・少子化に伴い、いずれ統廃合となるのは仕方がない、と受け入れている様子であった。
- ・最初は統廃合に対して懐疑的であったが、現状について説明すると、その必要性について理解された。より具体的に分かりやすく共有することで、必要性を理解し、より多様な意見が出てくるのではないかな。

(適切な学校規模・学級数・統廃合の具体案について)

- ・義務教育学校は、友達とのつながりがより強くなると思う反面、教員の仕事内容が増えるのではないかなと思う。
- ・前回の委員会であがった20～25人1学級という意見に賛同する。児童生徒数が減ることによって、教員の負担が減り、その分一人一人の児童生徒に対して親身に教えてくれるのではないかな。子どもたちに教える立場である教員の心に余裕があれば、子どもたちも楽しくなると思う。
- ・1学年1学級について、ずっと続いていたため特に不満はない。
- ・大野町の大きさに対して、中学校が2校あることが疑問である（隣接する神戸町、池田町には各1つずつ）
- ・小中一貫になることも視野に入れて良い。兄弟の保護者はお迎えも一度で良くなったり、付き合いが増えたり、といったメリットがある。

(統廃合後の通学について)

- ・スクールバスについては、事件、事故、天候（雷など）の心配が少なく、親としては安心する。
- ・スクールバスが利用できれば、親は助かる。

- ・学校が変わるのであれば、交通手段を考えて欲しい。スクールバスの運用は必要である。
- ・神戸町の中学生は毎日自転車で通学している。小学校のうちにはスクールバスも一つの手であるが、中学校は自転車通学でも良いのでは。
- ・スクールバスを使うことで、基礎体力が低下することが心配である。
- ・スクールバスを運用する場合、体力を養う面で不安を感じる方もいた。1年生から徒歩で通学するとなると、初めは不安に思うが、次第に体力がついていくことが分かる。スクールバスを利用する場合、体力を養う機会について対策が必要である。
- ・学校が遠い家庭では、保護者が送り迎えをしている場合がある。これを含めて様々な面で配慮があれば良い。

(支援学級について)

- ・支援学級の教員は業務で忙しく大変であると思うが、教員が勉強できる場ができ、しっかりとした支援学級が設立されると良い。
- ・支援学級は、教育委員長の提案を受けなければ入れず、また、提案があっても断る人もいる。こうした現状にまだ課題がある。
- ・支援学級の児童生徒は、普通学級の児童生徒と触れ合う機会がない。学校の規模が大きくなり、支援学級も普通学級と同様の規模になることは、友達と触れ合うことが好きな子どもからすると魅力的である。

(その他)

- ・現場で働く教員や、保護者など、実際に子どもと向き合っている人達にも意見を伺ってほしい。
- ・新しく変わるのであれば、夢がいっぱい詰まった方向へ進められると良い。そうするとより興味関心を持つ人も増えるのではないか。
- ・大野町に住む児童生徒や町民の意見を聞く場がもう少しあると良い。
- ・こども園は、人数の兼ね合いで合併することはしてほしくない。それぞれ特性があり、その特性を求めて通うっている。通勤の関係で親の負担を減らすために選んでいる人もいる。

教育関係者目線

(適切な学校規模・学級数・統廃合の具体案について)

- ・岐阜県の基準である35人1学級の場合、教員がきめ細やかに対応することは大変である。学習以外の自由な時間で社会性を学ぶことが多いのであれば、そういった時間でも教員の目が行き届くことが重要ではないか。35人1学級の基準について、柔軟に考えて良いと思う。

- ・小中一貫の義務教育学校とした場合、教科担任制になるのは強みになる。

(地域とのつながりについて)

- ・学校の統廃合が行われる場合、地域の繋がりや地域で活躍する土台を、地域の良さを活かしながらデザインしていくことは難しい課題である。
- ・全国的に不登校やいじめ、自殺等の問題が増加しており、集団が多くなるほど一人も取り残さないことが難しくなっている。全体指導と個別指導のバランスも含め、質の向上を図りながら、子どもたちをどういうふうに育てていきたいのか、地域も学校も保護者も同じベクトルで進めていかなければならない。

(その他)

- ・現場で働いている人や保護者と、委員会の場では、意見が異なるように感じる。
- ・支援学級や不登校の児童生徒への対応を含め、一人一人の個性を活かせるような、次世代の教育を考慮して欲しい。
- ・どのような児童生徒数であろうと、子どもたちが自ら学びに向かう力を育むため学びの改革、すなわち教員の意識改革を進める必要がある。
- ・学校の在り方を見直すことをきっかけに、目の前の子どもたちにどのようなことを身に付けさせたいか、教員が自分事として考えるべきである。揖斐郡内の教員のほとんどは、単学級しか経験していない。また、学年主任と言っても2学級以上を担当することは少ない現状である。
- ・大野町に魅力を感じ転入者が増えると、将来に児童生徒数は推計より増える可能性もある。子育て世代が魅力に感じる大野町独自の教育をたくさん取り入れた学校ができるとうい。
- ・義務教育学校である北方町立北学園に視察に行った。知らないのに論じることはできないため、今後も様々知見を持ち、議論していかなければならない。

委員会の進め方について

- ・少子化の現状を理解すると統廃合の必要性を感じる人は多いが、理解していない人が多くいる。共有の仕方を考えるべきである。
- ・本委員会は、この後町が具体的な検討を進めるための方向性を示すことである。具体的な議論はその次の段階である。

○その他

- ・次回委員会は、答申案について議論を予定する。

以 上